【主題名】小さな命の重さ
【教材名】ヒキガエルとロバ
（わたしたちの道徳　3・4年　文部科学省）

発行
令和元年
11 月 19 日
中部教育事務所

授業者　山下　和香 教諭（南国市立岡豊小学校）

内容項目【生命の尊さ】

本時のねらい　◇ヒキガエルを助けたロバの姿を見たアドルフの行動を振り返り、生命の尊さを考えることを通してさまざまな生命を大切にする心情を育てる。

指導の要点　◇ロバとアドルフたちのカエルに対する心情を比較することを通して、命に大きいも小さいも関係なくどんな命も尊いこと、一つしかない生命の大切さなどを知り、今後の生活に生かしていく。

授業を通して引き出したい児童の考え

◇どんな命もすべてかけがえのない、大切なものだ。
◇アドルフとロバの行為を比較して、カエルを助けたロバの、弱っているカエルを思いやるやさしさに気付いた。
◇アドルフたちの行為をふり返ることによって、今度からは自分たちもロバのように小さな生き物の命を大切にしていきたい。

本時の展開

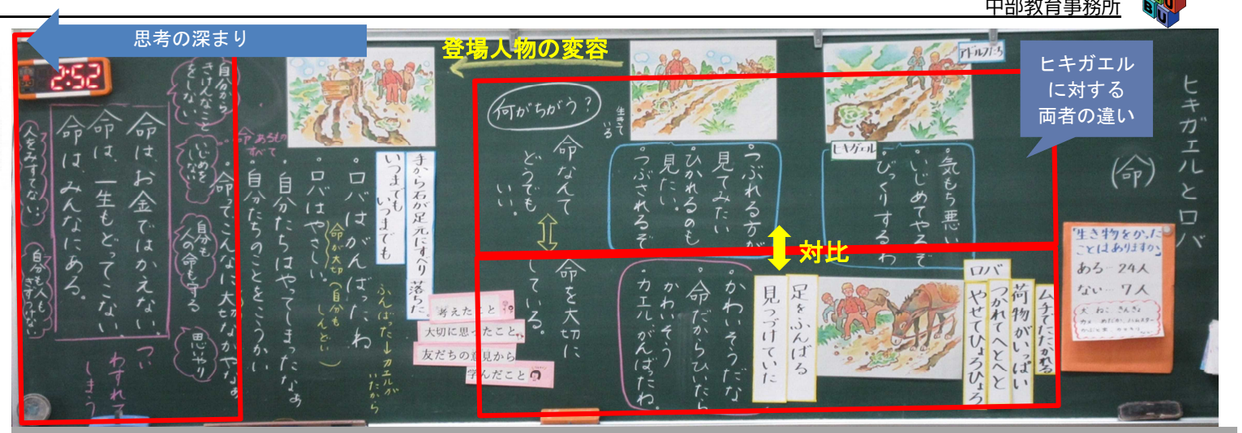
学習活動と主な発問　○発問　◆補助発問や問い返し	予想される児童の反応
1　「生き物を飼った経験」についての事前アンケート結果を見る。 ○上手にお世話ができましたか。どんなことが大変でしたか。	・イヌ、ネコ、メダカ ・餌を毎日あげることが大変・そうじが大変
2　ヒキガエルに石を投げるアドルフたちの気持ちを考える。 ○アドルフたちはどんな気持ちで石を投げていたのだろう	・おもしろいだろうなあ・いじわるしてやる ・痛がっている姿が見たい
3　石を投げるのをやめるきっかけとなったロバの行動について考え、アドルフたちとロバの命に対する考えの違いに気付く。（グループ） ○ヒキガエルを見続けているロバはどんなことを考えていただろう ○アドルフたちとロバでは命に対しての考え方がどう違うのだろう	・動けないの？・このままだとひいてしまう ・よけてあげよう　・命があるから助けたい ・アドルフ：命の大切さが分かっていない ・ロバ：命の大切さを知っている
4　くぼみの中のヒキガエルと去って行くロバを見ながらアドルフたちが考えていることについて話し合う。 ◎いつまでも眺めていたアドルフたちは何を考えていたのだろう ◇命ってどうして大切なの？ ◇アドルフたちは命の大切さを知らなかったのかな？ ◇命を大切にするって、みんなにとってどういうこと？	・なんてことをしてしまったんだ ・自分たちのしたことに後悔 ・小さな生き物にも優しくしたい ・僕たちは命を大切にしていなかった
5　学習をふり返り、自分の考えをノートに書く。 考えたことや友だちから学んだこと、大切に思ったことを書きましょう ○生き物が一生懸命に生きている姿を見たことがありますか	

児童のノート　～多様な観点から命を捉え直し、自らが納得できる答えを導き出す学びへ～

ヒキガエルがいじめられているのを見て、直接ではなくロバが心の中から相手の心の中へ「心は大切だよ」と伝えることがすごいと思いました。誰かがいじめられていると、僕もやって教えて、自然や人の心をずっと守りたいです。

命を大切にしないといけないんだなと思いました。命は自分のも他の人の命でも動物でも生き物なら区別をつけずに暮らしていけたらいいなと思いました。それだけ命というものは大切なんだなと思いました。

命を大切にするというのは、例えば、どんなに小さな命や大きな命でも、いじめたりちょっかいを出したりしないことだと思います。そして、親切にすることだと思います。親切にするというのは、けがをしたり泣いていたりしたら声をかけて優しくするということだと思います。



授業づくりのポイント　及び　引き出された反応

①自分自身との関わりで考えるための工夫

生き物を飼った経験についての学級アンケート結果を糸口に餌やりや散歩が大変だという経験を共有し、教材を通して考える主題「小さな命」に関して、自分達にとって身近な生命である生き物との関わりについて想起させる。

②多面的・多角的に捉えるための工夫～違いや変容を可視化する構造的な板書で気付きを促す～

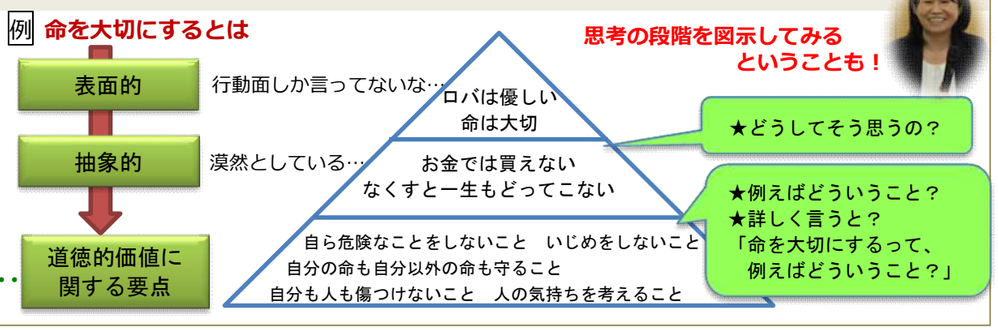
ヒキガエルに石を投げるアドルフたちと、避けようと力を振り絞るロバ。行動とその思いを場面順に追う。板書を上下に書き分けることにより、同じカエルを見ているのに、小さな命に対する両者の捉え方が異なっていることに気付く子供たち。そこで、「命に対してどんな考え方の違いがあるのか？」と問う。「アドルフは命はどうでもいいと思っている。小さな命でも大きな命でも気持ち悪いからいじめて…」「でも、ロバは小さな命でも命は一つしかないから、大切にしている」「ロバ、すごい！」といった反応が引き出された。

③主題に迫るための工夫　～児童の声からさらに問いを重ね深めていく過程の重視～

ヒキガエルの小さな命に対するロバの姿が強く印象に残っている子供たちに、中心場面での発問が投げかけられた。授業者の言葉を先取りした声が挙がる等、石が手から滑り落ちた場面を考えたい様子がうかがえる。「こんだけ命は大切ながやなとアドルフはロバを見て思った」「もしかしたらロバの心の中からアドルフの心の中へ教えたと思う」登場人物に自我関与させた意見が出されるなか、問いは続く。**さっきから命が大切ってみんな言っているけど…教えて。どうして命は大切？「先生、そんなこともわからんが？」**　咄嗟に出た児童の声に、教室がざわざわし始めた。お決まりの答えに、任せてとばかりにたくさんの挙手。「命は１つしかない」「戻ってこない」…

そこで、道徳的価値に関する要点の段階へと、さらに深く誘う。**アドルフは命の大切さを知らなかったの？**「いじめることで頭がいっぱい」「つい忘れてしまった」「気持ち悪いし人間さえ生きていればいいわみたいな…」登場人物との距離は人間理解を通して自分ごとに縮まり、経験をもとに言語化しようとする姿へと変容していく。

みんなにとって命を大切にするって、例えばどういうことなの？隣同士でぶつぶつと話し始める児童。天井を見つめたままの児童。両手を組んでじっと動かない児童…。命としっかり向き合い対話している姿である。反応を大切に取り上げながら問いを重ねることにより、自他の命を大切することの意味や、自分にとって命を大切するとはどのようなことなのかを考える意識の流れが生まれ、道徳的価値観を更新する深い学びの実現へとつながった。

講師による指導・助言（高知大学　森 有希　准教授）～子供の意見をどうやって深めれば？～

生命は唯一無二であることや、自分一人のものではなく多くの人々の支えによって守り、育まれている尊いものであること、また、与えられた生命を一生懸命に生きることのすばらしさなどについて考えを深めさせたい。